

H-4 保安語積石山方言の話し手は文が表す事態をどのように捉えているのか

広島大学 佐藤暢治

0. はじめに

保安語積石山方言とは、中国の甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治县で話されているモンゴル系の言語である¹⁾。この言語の話し手は、述部の違いを通じて文が表す事態を二分して捉える。その役割を担うのが、表1のように、名詞文、所在文、存在文と形容詞文は繫辞動詞または存在動詞であり、動詞文は動詞語尾である。斜線より前の形式を総称して「I形式」、後ろの形式を「O形式」と呼んでおく。

表 1	肯定	否定		肯定	否定
名詞文	i / o 【繫辞】	ci / co 【繫辞】	動詞文 現在	-m / -nə	lə -m / lə -nə
所在文	i / o	gi / ginə 【存在】	過去	-o / -tc	si -o / si -tc
存在文	vi / va 【存在】	gi / ginə	経験	-saŋ vi / -saŋ va	-saŋ gi / -saŋ ginə
			継続	-dzi / -dzo	-dzi gi / -dzi ginə
形容詞文	i / o	gi / ginə	完了	-dzi /	si -dzi /
	vi / va	ci / co	予定	-gi / -go	-gə ci / -gə co

本発表は、保安語積石山方言の話し手が文が表す事態を二分して捉えるとき、そこにどのような基準が働いているのかを、筆者がフィールド調査で得た資料に従い、明らかにしようとするものである。

1. 先行研究とその問題点

保安語積石山方言の先駆的な研究である Todaeva, B.X. (1964) では、述部は人称と一致する関係にあると見ている。つまり、平叙文では、「I形式」は一人称の主語と使われ、「O形式」は二人称や三人称の主語と使われる、と。確かに、平叙文では「I形式」が話し手に関わる事態を、「O形式」が聞き手、あるいは話し手と聞き手以外の第三者、物などに関わる事態を述べるのに使われることが多い。しかし、意味の差を考慮しなければ、(1b)のように話し手のことを述べる場合であっても、「O形式」は使える。

- (1) a. bu bidzinə galo. 「私はコップを割った」 【gal-o 割る-過去・I形式】
 b. bu bidzinə galte. 「私はコップを不注意で割ってしまった」 【gal-te O形式】

劉照雄 林蓮雲(1980)、布和 劉照雄(1982)は、保安語積石山方言が用いる二形式について、「I形式」を「確定語気(話し手の直接経験、自身の経験、主観的な決定、意図)」、「O形式」を「非確定語気(話し手以外の経験、話し手の意図に反する事態等）」と呼び、(2)のような例と説明を挙げている。

- (2) a. tɕa hordə oro. 「鶏が巢に入った(話し手自身が目撃)」 【or-o 入る-過去・I形式】
 b. tɕa hordə ortc. 「鶏が巢に入った(話し手自身は目撃していない)」 【or-te O形式】

(2)の説明にも問題がある。(2a)は、話し手が鶏が巢に入る過程をずっと見ていた、あるいは話し手が巢に入る鶏の習性を知っており、実際にそうなったときに使うのが適切である。一方、(2b)は話し手がたんに鶏が巢に入ったその場面だけを見て使うのが適切である。(2)での使い分けは、話し手が目撃したか目撃していないかという情報源ではない。関与するのは、文が表す事態の何を話し手が把握したかである²⁾。巢に入るまでの過程全体(2a)か、それとも巢に入る場面のみ(2b)かである。鶏が巢の中にいるという結果だけなら、完了の-dziを用いた tɕa hordə ordzi. 「鶏が巢に入っとる」(=26)が用いられる。

また、不正確と思える naraŋ duŋfaŋsə ɕarəm. 「太陽は東から昇る」のような例も挙げられている。一般的な知識を表すこの文の動詞は、「I形式」の現在形 ɕarəm ではなく「O形式」の継続形 ɕardzo が適切である。

劉照雄(不詳)でも上と同様の立場から、naraŋ duŋfaŋsə ɕarəm. 「太陽は東から昇る」を含め多くの例を挙げている。しかし、個々の例の説明にとどまり、二形式の総括的な説明にまで及んでいない。また、「確定」と「非確定」という名称についても、劉照雄氏自身が必ずしも使い分けの実態を表しているとは言えないと

1) 保安語積石山方言の話し手はイスラム教を信じる保安族。保安族の総人口は 20,074 人(2010 年)であるが、保安語積石山方言の話者数となると、総人口数よりはかなり少ない。危機言語の一つに位置づけられている。保安語積石山方言には下位方言として大墩方言と甘河灘方言があるが、本発表は大墩方言に基づく。母音は 7 つ(a, i, u, e, o, ə, ɤ)、子音は 25 個(p, b, t, d, k, g, ɣ, f, v, s, ʂ, c, ɕ, h, dz, ts, dz, tc, dz, m, n, ŋ, r, l, j)。

2) 保安語積石山方言における過去の -o、-tc と完了の -dzi の使い分けには、井上(2001)が論じた日本語の「た」と「ている」の使い分けと類似したところがある。井上(2001:106)が挙げているお湯の沸騰に関わる例(28)を保安語積石山方言では、水から湯までの沸騰過程を捉えた a と b は過去の -o、結果を捉えた c は完了の -dzi を用いる。沸騰し始めたその実現場面だけを表すなら -tc、沸騰の最中を表すなら -dzo が適切である。

述べている³⁾。

2. 文が表す事態における有標と無標

保安語積石山方言の話し手が文が表す事態をどのように捉えているのかを明らかにするには、上にも触れた次の点に注目する必要がある。それは、平叙文の場合、話し手に関わる事態では「I 形式」が、そして聞き手に関わる事態と話し手と聞き手以外の第三者、物などに関わる事態(以下、第三者に関わる事態と呼ぶ)では「O 形式」が使われることが多いという点である。二形式のうち、多く使われる方が事態をありのままに述べる通常の無標の文とすれば、もう一方は特別な意味が伴う有標の文となる。表 2 のとおりである。

疑問文の場合、有標と無標の関係が逆になる。議論を複雑にしないため、疑問文の事例は必要に応じて示すことはあるが、考察の対象からは外しておく。

表 2

	I 形式	O 形式
話し手に関わる事態	無標	有標
聞き手に関わる事態	有標	無標
第三者に関わる事態	有標	無標

3. 名詞文、所在文、存在文

名詞文、所在文、存在文を見る。保安語積石山方言の話し手が無標の形式を使う文を、(3)に示しておく。

(3)	名詞文	存在文	所在文
話し手	bu bonan kuŋ i. 「私は保安人です」	nadə ou nəgə vi. 「私には息子が一人います」	bu bedziŋdə i. 「私は北京にいます」
聞き手	tci bonan kuŋ o. 「あなたは保安人です」	tɕodə ou nəgə va. 「あなたには息子が一人います」	tci bedziŋdə o. 「あなたは北京にいます」
第三者	dzaŋ bonan kuŋ o. 「彼は 保安人です」	dzaŋdə ou nəgə va. 「彼には息子が一人います」	dzaŋ bedziŋdə o. 「彼は北京にいます」

有標となる場合を見ていく。まず、話し手に関わる事態で有標の「O 形式」が使われるのは、話し手自身が制御できない、ないしは意図に反する事態(4b 否定)、事態が把握できていない場合(4b 肯定、5b)、仮定の話(6b)のような場合である。

- (4) a. nadə ser vi. / nadə ser gi. 「私にお金がある／私にお金は(一時的に)ない」
b. nadə ser va. / nadə ser ginə. 「私にお金が(なぜか)ある／私にお金は(いつも)ない」
(5) a. buda bonan kuŋ i. 「私たちは保安人です」
b. buda bonan kuŋ o. 「(全員がそうであるか話し手は把握していない)私たちは保安人です」
(6) a. bu bedziŋdə i. 「私は北京にいる」
b. bu bedziŋdə o. 「私が北京にすることにする」

次に、第三者に関わる事態で「I 形式」が使える場合を見る。「I 形式」を使うには、話し手が個人的な体験として第三者と、文が表す事態そのものの両方を熟知記憶しておかなければならない。

- (7) a. hakinə aje ši mabufaŋnə tcerigə i ja. 「ハキの祖父は馬歩芳の軍人です」
b. hakinə aje ši mabufaŋnə tcerigə o ja.

(7a)を使えば、話し手がハキの祖父のこと、さらにはそのハキの祖父が馬歩芳の軍人であったことを個人的に熟知していることを示すことになる。そのいずれか一方を熟知記憶しているだけでは(7a)は使いがたい。とはいえ、こうした条件を満たしていても、必ず(7a)を使わなければならないというわけではない。話し手が聞き手を配慮し、個人を避けるなら、(7b)が使われる。

その一方で、文が表す事態に人が関与しない場合には、異なる振る舞いを示す。隣の部屋に何があるのかをたずねられたとき、話し手はダム(餅)の存在をあらかじめ知っており、記憶していれば(8a)を、知らなければ(8b)を使う。隣の部屋にダムがあることをすでに知っている話し手が、(8b)を使うことはない。

- (8) a. damu vi. 「(ダムがあることを知っている)ダムがある」
b. damu va. 「(何があるのか知らないので見て、確認して)ダムがある」

話し手が話し相手の発話を受け、その相手に確実な反論をする場合にも、(9)(10)のように「I 形式」が使われる。

- (9) A: tə banduŋ xəranə o. 「その椅子は黒色です」 B: cə. fulaŋnə i. 「違います。赤色です」
(10) A: hakiðə agu gə va. ou gə va. 「ハキには娘と息子がいます」 B: gaŋdə agu gi. 「彼に娘はいない」

3) 劉照雄(不詳)には劉照雄 林蓮雲(1980)が言及されており、それよりは後に書かれたものである。

話し手は、(9)であれば椅子の色が赤であることを、(10)であればハキとそのハキに娘がいなことを個人的な体験として熟知記憶していることが不可欠である。話し相手の発話を配慮し、それにあわせるならば、(9)の場合、Bが「O形式」の *co* で否定しているように、その後ろも「O形式」を用いた *fulaŋnə o.* となる。

名詞文、所在文、存在文では、このように話し手が文が表す事態とそれに関わる人や物を個人的な体験として熟知記憶していることが「I形式」を使う鍵となる。そのため、聞き手がそうした点を持ち合わせていると話し手が見なす場合、第三者のことをたずねる疑問文でも(11)のように「I形式」が使える。

(11) A: *haki lincədə halgu kuŋ i?* 「ハキは臨夏のどこの人ですか」 B: *tə bonan kuŋ i.* 「彼は保安人です」

目の前にいる聞き手に関わる事態で話し手が「I形式」を使うことがある。たとえば、明らかに嘘をついている話し相手への反論のような場面にである。昨日家にいたにもかかわらず臨夏にいたと主張する話し相手に、その話し相手が家にいたことを知っていれば、話し手は *tei gude lincədə gi, kətə i.* 「あなたは昨日臨夏にはいなかった、家にいたはず」と言える。

名詞文、所在文、存在文における「I形式」と「O形式」の使い分けを整理すると、表3のようになる⁴⁾。

表 3	文が表す事態	I形式	O形式
	話し手に関わる事態	無標	有標 ・ 非制御 ・ 非意図 ・ 非把握 ・ 仮定 ・ 聞き手への配慮
	聞き手に関わる事態 第三者に関わる事態	有標 ・ 熟知記憶(人が関与する場合 にはその人のことも) ・ 聞き手への確実な反論	無標

4. 形容詞文

形容詞文を見る。聞き手や第三者の事態を表す形容詞文において、意味的にもっとも無標なのは「O形式」を使う(12a)のような文である。ただし、形容詞文の場合、平叙文では文末の助動詞そのものが省かれることも普通に観察される。また、(12b)のように「O形式」ではありながら、肯定文に *va*、否定文に *co* を使うと「とても」という意味をとまう。

(12) a. *nə noŋəi go o. / go giŋə.* 「この犬は大きい／大きくない」 【go 大きい】

b. *nə noŋəi go va. / go gə co.* 「この犬はとても大きい／あまり大きくない」

このような聞き手や第三者の事態を表す形容詞文で「I形式」が使われるのは、少なくとも二つの場合である。その一つは、(13a)のような推測である。この推測は話し手の目の前の状況からなされるものであり、断定性の強いものである。

(13) a. *nə dziŋ ɣədəŋ i.* 「(井戸の状況を観察して)この井戸は深いはず」 【ɣədəŋ 深い】

b. *nə dziŋ ɣədəŋ o.* 「この井戸は深い」

(13a)は(13b)とは異なり、話し手が井戸に石を投げたりし、井戸の深さを判断するときに使われる。もう一つは、(9)(10)と同様に話し手が自分なりの確実な反論をする場合である。そのために、(14)のBはCの発言を受け、単なる事実を示す「O形式」から確実な主張を示す「I形式」へと形式を変えている。

(14) A: *nudə dəxədzidə kuŋ oloŋ u?* 「今日大河家に人は多いですか」 【oloŋ 多い】

B: *oloŋ giŋə.* 「多くない」

C: *oloŋ o.* 「多い」 → B: *oloŋ gi.* 「多くない」

話し手に関わる事態には「I形式」が期待されるが、聞き手への配慮が働いているときには(15b)のように「I形式」ではなく、「O形式」が使われる。

(15) a. *bu saŋ i / *o.* (話し手から言う場合)「私は元気です」 【saŋ 良い】

b. *bu saŋ *i / o be.* (*tei saŋ i ʃa?* 「お元気ですか」の答えとして)

4) 「大河家に(保安)腰刀店がある」、これは、保安語積石山方言の話し手であれば誰もが知る一般的な知識に属することである。そのため、「大河家に腰刀店がある」を保安語積石山方言で表す場合、通常は存在動詞に「O形式」の *va* を用いた *dəxədzidə dogonə pudzi gə va.* となる。ただし、聞き手に保安語は解せるが大河家に腰刀店があることを知らない人を想定し、大河家に腰刀店があることを話し手の個人的な体験として言い表すのであれば、「I形式」の *vi* を用いた *dəxədzidə dogonə pudzi gə vi.* が言えなくはない。ただし、これはあまりにも日常生活からかけ離れたものである。また、動詞文である「黄河は青海から流れてくる」も一般的な知識であるため、「O形式」を用いた *maroŋ teiŋxesi teurdzo.* 【*teur-dzo* 流れる・継続・O形式】が普通である。「I形式」を用いた *maroŋ teiŋxesi teurdzi.* 【*teur-dzi* I形式】は、上と同様に特殊な状況を設定しないかぎり、言えない。

(15b)では聞き手への返事として「I 形式」を使わないことで、直接的な表現を避けようとしているものと思われる。

形容詞文における「I 形式」と「O 形式」の使い分けを整理すると、表 4 のようになる。

表 4	文が表す事態	I 形式	O 形式
	話し手に関わる事態	無標	有標 ・ 聞き手への配慮
	聞き手に関わる事態 第三者に関わる事態	有標 ・ 断定性の強い推測 ・ 聞き手への確実な反論	無標

5. 動詞文

動詞文は(1)(2)でも取りあげたが、より詳しく見ていく。まず、保安語積石山方言の話し手が話し手に関わる事態で有標の「O 形式」を使うのは、話し手にとって制御できない事態、話し手の意図に反する事態、話し手にとって予想外の事態、仮定の事態、そして聞き手への配慮である。このうち話し手にとって制御できない事態には、動詞の意味が深く関わる。(16)に使われた動詞 *etə-*「病気になる」は、その代表的な動詞である。「O 形式」である過去の *-tc*、継続の *-dzo* とともに使われている。

(16) *bu gudə etətɕ. / bu da etədzo.* 「私は昨日病気になった／私は今病気である」

このような非制御動詞として、そのほかにも *edəri-*「疲れる」、*ɣucalə-*「足がだるい」、*dalə-*「老いる」、*ɣanə-*「咳をする」、*e-*「怖い」、*martə-*「忘れる」、*da-*「遅れる」、*jexə-*「失う」、*kəri-*「必要がある」などがある。また、*madə-*「知る」と *da-*「できる」の否定は、通常 *madədzi ginə*「知らない(恒常的)」、*madəgə co*「知らない(場面的)」、*lə madənə*「知らない(恒常的)」、*dadzi ginə*「できない(恒常的)」、*dagə co*「できない(場面的)」のように「O 形式」で使われる。ただし、*madə-*「知る」の場合、知り得る可能性が将来にあれば、否定であっても *madədzi gi*「知らない」、未修得が当然というのであれば *lə madəm*「(未修得で)できない」(*bu rako u lə madəm*「私は酒が飲めない」)のように「I 形式」が使われる。*olə-*「生まれる」、*nasilə-*「何歳になる」*dəraŋ kuri-*「したい」、*gedə-*「病気が治る」なども制御できない事態とは見なされない。

話し手の意図に反する事態は、(1b)に述べたものである。(1b)は過去のことであるが、未来も同様である。(17b)は、話し手の明日が自らの意図とは無関係に、他者により決められてしまっていることを示している。

- (17) a. *bu maɕigə gora orsidə legəgi.* 「私は明日雨が降っても働く」 【*legə-gi* 働く-予定・I 形式】
 b. *bu maɕigə gora orsidə legəgo.* 「私は明日雨が降っても働くことになっている」 【*legə-go* O 形式】

ただし、無理やり行きたくない場所に連れて行かれたときでも、話し手が用いるのは「I 形式」(*bu bedziŋdə dzo.*「私は北京に行った」)であり、「O 形式」(**bu bedziŋdə dzitc.*)ではない。

話し手にとって予想外の事態とは、(18b)のような思いがけない事態の実現である。

- (18) a. *kuro.* 「着いた」 【*kur-o* 着く-過去・I 形式】
 b. *kurtɕ.* 「着いてしまった」 【*kur-tɕ* O 形式】

(18b)が使えるのは、話し手はまだ目的地に着かないと思っていたのに、思いもよらず目的地に着いてしまったといった場面にである。目的地に着くことがあらかじめわかっていたら、(18a)しか使えない。

話し手は自らに関わる仮定の話をするときにも、(19b)のように「O 形式」を使う。

- (19) a. *bu maɕigə bedziŋdə dzigi.* 「私が明日北京に行く」 【*dzi-gi* 行く-予定・I 形式】
 b. *bu maɕigə bedziŋdə dzigo.* 「私は明日北京に行くとする」 【*dzi-go* O 形式】

さらに聞き手へ配慮をするときにも、「O 形式」が使われる。(19b)のような文がそのまま使える。「O 形式」を使うことで、談話の場を共有する話し相手に直接的な表現を避けるという配慮が働く。

次に、聞き手に関わる事態と第三者に関わる事態を見る。通常は「O 形式」である。それにもかかわらず、有標の「I 形式」を使うのは、文が表す事態の実現過程を話し手が把握している場合、過去や未来の事態を断定的に推測する場合、話し手が聞き手に確証のある反論をする場合である。

文が表す事態の実現過程を話し手が把握している例は、(2)で見たとおりである。(20)から(22)にも同様の例を示す。(20)は過去、(21)は習慣、(22)は経験である。

- (20) a. *teinə aje ɣardzi ro be.* 「君のおじいさん、帰ってきたよ」 【*ro<ri-o* 着く-過去・I 形式】
 b. *teinə aje ɣardzi ritc be* 【*ri-tc* O 形式】
 (21) a. *nə pudzi etalji 8 dzandə nedzi.* 「この店は朝 8 時に開いている」 【*ne-dzi* 開く-継続・I 形式】
 b. *nə pudzi etalji 8 dzandə nedzo.* 【*ne-dzo* O 形式】
 (22) a. *haki bedziŋdə dzisaŋ vi.* 「ハキは北京に行ったことがある」 【*dzi-saŋ vi* 行く-経験・I 形式】

(20)では、臨夏から自宅がある大河家までバスで帰るという場面を考えるとする。このとき(20a)の話し手としてふさわしいのは、おじいさんの同行者か、あるいは同じバスにおじいさんが乗りあわせていたことを、バスが大河家に到着するまでには気づいていたおじいさんの知り合いである。目的地に着いてはじめて、おじいさんが同じバスに乗っていたことに気づいたのであれば、おじいさんの知り合いであっても(20a)ではなく、(20b)を使うのが適切である。(21a)の話し手としてふさわしい人物は、その店を日々管理している店の関係者である。店の関係者以外の者であれば、(21a)ではなく、(21b)を使うのが適切である。(22a)もハキの同行者であれば使える。同行者でなければ(22a)ではなく、(22b)を使うのが適切である。

事態全体が把握されていない場合には、今まさに目の前で起きていること、起きつつあることであっても、(23)(24)のように「I 形式」は使えない。

(23) təga hordə *ordzi / ordzo. 「(目の前で)鶏が巢に入ろうとしている」 【or-dzi /dzo 入る-継続・I / O 形式】

(24) gora *ordzi / ordzo. 「(目の前で)雨が降っている」 【or-dzi /dzo 降る-継続・I / O 形式】

cf. bu dzidzi / *dzidzo. 「私は行っている(途中)」 【dzi-dzi /dzo 行く-継続・I / O 形式】

(25a)では、第三者が明日おこなうことについて「I 形式」が使われている。これは事態の決定が話し手によってなされていること、つまりは行くことの決定から行くまでの過程が話し手によって管理されていることを示している。(19)と裏返しの関係にある。

(25) a. haki maŋigə bedziṇdə dzigi. 「ハキは明日北京に行くことになっている」 【dzi-gi 行く-予定・I 形式】

b. haki maŋigə bedziṇdə dzigo. 「ハキは明日北京に行く」 【dzi-gi O 形式】

断定的な推測は、眼前の状況から過去の事態、あるいは未来の事態を話し手が推測するというものである。過去の断定的な推測には(26)(27)のように完了の-dzi、未来の断定的な推測には(28)(29)のように現在の-mが使われる(現在の-mと-nəが動作動詞とともに用いられるとき、その主語は三人称に限られる)。

(26) təga hordə ordzi. 「鶏が巢に入っとる」 【or-dzi 入る-完了・I 形式】

(27) gora ordzi. 「雨が降っとる」 【or-dzi 降る-完了・I 形式】

(28) haki esaŋ bedziṇdə dzim. 「ハキは来年北京に行くはず」 【dzi-m 行く-現在・I 形式】

(29) gora orim. 「雨が降るはず」 【ori-m 降る-完了・I 形式】

(26)の場合、話し手は巢の中にいる鶏を見て、それ以前のある時点で鶏が巢の中に入ったことを断定的に推測している。(27)の場合も、話し手は降雨の痕跡である水たまりや濡れた道を見て、それ以前のある時点で発生した降雨を断定的に推測している。話し手は、発話時における眼前の状況(結果、痕跡)を手がかりに、直接目にしていない過去の事態を断定的に推測しているわけである。(28)は、ハキは数年に一回必ず北京に行っているが、昨年と今年には行っていない。だから、来年は行くはずだがという話し手の断定的な推測を表している。(29)も、空に広がる黒い雲を見て、それを根拠に雨が降るはずという話し手の断定的な推測を表している。

とはいえ、「I 形式」と「O 形式」どちらを使ってもかまわないということが多い。(30)がそうである。

(30) a. gudə gora oro. 「昨日雨が降った」 【or-o 降る-過去・I 形式】

b. gudə gora ortc. 「(カレンダー的に)昨日雨が降った」 【or-tc O 形式】

(30a)を使うと、話し手が昨日の雨を個人的な体験として捉えていることになる。一方、(30b)を使うと、話し手は昨日の雨を個人的な体験とはせず、たんなる事実としてカレンダー的に言い表していることになる。(30a)と(30b)との間には、こうした違いがある。そのため、ある特定の記念日に雨が降ったということを言い表そうとすれば、誰もが知っている一般的な知識のような扱いになるからであろう、「O 形式」が使われる。

話し手が聞き手に確実な反論をしたければ、「I 形式」が使われる。(31)を挙げておく。(9)(10)(15)と同様である。BがAを配慮するなら、AはBに個人的な体験を示さない「O 形式」を使ったことであろう。

(31) A: dzaŋ daŋədzidə risaŋ ginə. 「彼は大河家に来たことはない」 【ri-saŋ ginə 来る-経験・否定・O 形式】

B: tə kuŋ risaŋ vi. 「その人は来たことがある」 【ri-saŋ vi I 形式】

A: kətei ro? 「いつ来た」

B: gaŋ 1960niandə ro. 「彼は1960年に来た」

聞き手に関わる事態で、話し手が聞き手に確証のある反論をする場合にも、tci nənə kalo be. 「あなたがこのことを話したよ(kal-o 「話す-過去・I 形式」)」のような文が使われる。

動詞文における「I 形式」と「O 形式」の使い分けを整理すると、表5のようになる。

表 5	文が表す事態	I 形式	O 形式
	話し手に関わる事態	無標	有標 ・ 非制御 ・ 非意図 ・ 予想外 ・ 仮定 ・ 聞き手への配慮
	聞き手に関わる事態 第三者に関わる事態	有標 ・ 実現過程を把握 ・ 断定的な 推測 ・ 聞き手への確実な反論	無標

6. まとめ

保安語積石山方言の話し手が、文が表す事態をどのように捉えているのかについて、平叙文を中心に見てきた。「I 形式」と「O 形式」の使い分けを整理すると、表 6 のようになるであろう。

表 6	文が表す事態	I 形式	O 形式
	話し手に関わる 事態	無標	有標 ①話し手の個人的な体験ではあるが ・ 非制御 ・ 非意図 ・ 予想外 ・ 仮定 ②話し手のことよりも聞き手への配慮
	聞き手に関わる 事態 第三者に関わる 事態	有標 ①話し手の個人的な体験の関与 ・ 実現過程を把握 ・ 事態(とそこに人が関与する場合 にはその人のこと)を熟知記憶 ・ 断定的な推測 ②話し手から聞き手への確実な反論	無標

この使い分けをどのように捉えるのがよいであろうか。表 6 のように、二つに分けて考えるのがよいであろう。一つは、文が表す事態に話し手が自身の個人的な体験の関与があると見なしているかどうかである。話し手に関わる事態で「O 形式」が使われる非制御、非意図、予想外、仮定というのは、話し手自身のこととはいえ、話し手自身がその事態に関与しているとはいいがたい非自己的なものである。一方、聞き手・第三者に関わる事態で「I 形式」が使われる実現過程の把握、熟知記憶、断定的な推測というのは、他人のこととはいえ、話し手の個人的な体験が関わっている、あるいは関わりがあると見なされるものである。

もう一つは、上から見れば但し書きになる聞き手との関係である。話し手に関わる事態で本来「I 形式」が使われてよいところに「O 形式」が使われるのは、聞き手への配慮のためである。一方、聞き手及び第三者に関わる事態で「O 形式」が使われてよいところに「I 形式」が使われるのは、話し手から聞き手への確実な反論のためである。これらは表裏の関係にある。後者は、言うならば聞き手への配慮を破る行為である。

とすれば、保安語積石山方言の話し手は、(32)のように、文が表す事態を話し手自身の個人的な体験の関与を軸に、自己中心か、それとも非自己・他者中心に捉えると言ってよいのではないだろうか。

(32)		「I 形式」	「O 形式」
		自己中心	非自己・他者中心
文が表す事態に話し手自身の個人的な体験の関与 ただし、聞き手との関係		有 反論	無 配慮

話し手が文が表す事態を捉えるとき、その中心に自己を置くのは自然なことである。ただし繰り返すが、「I 形式」と「O 形式」のどちらを使うかは、話し手に委ねられているところが少なくない。

最後に第三者に関わる過去の事態と未来の事態について、保安語積石山方言の話し手がどのように捉えているのかを、動詞語尾との関係から整理しておく。(33)のようになる。

- (33) 過去の事態： -o 実現過程を把握 -tc 実現 -dzi 眼前の状況(結果、痕跡)からの断定的な推測
未来の事態： -m 眼前の状況からの断定的な推測 -gi 実現過程を把握 -go 実現

参考文献

- 布和 劉照雄(1982)『保安語簡志』民族出版社
井上優(2001)「現代日本語の「タ」」、つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房、97-163.
劉照雄(不詳)『論保安語陳述式動詞的確定与非確定語気』中国社会科学院
劉照雄 林蓮雲(1980)「保安語和撒拉語里的確定与非確定語気」『民族語文』3, 24-28.
Todaeva, B. X. (1964) 《Baoanskij yazik》, Moskva: Nauka.